

---

# オルフェウスの翼

としくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オルフェウスの翼

### 【Zコード】

Z6639F

### 【作者名】

としくん

### 【あらすじ】

銀河大戦終結から十年後、この宇宙で、再び戦いの火蓋が落とされた。銀河連邦特別邀撃隊司令官ネルビー・モルラントは、火星で発掘された古代戦艦『ルシファー』を駆り、再び戦火に身を投じる。銀河連合VS黒銀河…勝利の旗を掲むのは…

## プロローグ

田の前に広がる漆黒の闇。

まるでその場にいるものを全て飲み込むような闇。

それに抵抗するかのように紅く、闇を照らしている太陽。

ネルビー・モルラントはそんな光景を懐かしそうな瞳で眺めていた。

「まもなく、火星『ジエノン基地』に到着いたします。シートベルトを着用して下さい。」

オペレーターの声がデッキに響き渡った。いよいよ到着だ。銀河大戦の終結後、第二級戦犯という大罪で月面裏のナハト刑務所に幽閉されて以来、十年近い時間が流れていった。ひさびさの長旅はこえたが、なかなか心地よい疲れだ。ただ、これが普通の旅行なら…の話である。

四日前、銀河連邦の官僚が突然面会に現れ、彼にこう告げた。

「もう一度、戦線で指揮を取る気はないか？」

勝手な話である。自分たちの都合が悪くなつたせいで有罪にしたくせに、都合が良くなればまた戻すのだ。

…自分たちは軍の駒ではない…

過去を振り返りながらネルビーはつぶやいた。

時に西暦2123年、ネルビー・モルラント少佐は、再び火星の大

地を踏んだ。

十年ぶりに訪れる火星は、確かに変わっていた。銀河連邦の戦艦ドッグや施設、都市ドームまで形成されている。ネルビーは思わずため息を漏らした。自分が指揮をとっていた時代とは、比べものにならないくらい開発されていたからだ。

「驚いたか？君がいた頃に比べたら少しはましになつたろ！」感傷にひたつていたら急に横槍を入れられた。入れてきたのは銀河連邦所属太陽系艦隊参謀を務める『クレイトン・ハウラー』だ。ネルビーを刑務所まで迎えに来たのも彼である。火星までの道中、ひたすら軍の文句をぶつぶつとつぶやいていた。自分はこんな事をしている場合ではない、とか、上は何を考えているんだ、とか…ストレスがたまる男だ。

「ひどいもんだぜ、こちとら太陽系艦隊の作戦参謀だつてのに！実際仕事つつつたらこんな使いっぱなしばかりだ。嫌になるぜ。」

どうやら今の役職に相当の不満があるみたいだが…彼の話はあまりネルビーの耳には届いていなかつた。なぜならば、彼は早く自分の指揮する船を見てみたかつた。昔の仕事柄か、うずくのだ。思い余つてクレイトンに噛み付くように言つてしまつた。

「で、私が指揮する船はどこにある？」

「おお～、そうだった。せつかく艦長服に着替えているんだしな、案内するよ」

いちいちわざとらしいやつだ、本気で船に乗せるつもりなのだろうか。ネルビーは次第に不安になつてきたりあえず後を追つてみた。建物に入り長い廊下を進んでいくと、ふいにクレイトンが口を開いた。

「四ヶ月ほど前にな、基地の横に新しい施設を建造しようとして地下を掘っていたんだ。」

ネルビーは歩きながらチラッと彼の方を見た。それに気が付いている

のか、クレイトンは話を進めていく。

「地下ハキロくらいかな。それまで順調だつたのに… その深さになつたら何か硬いものにあたつたんだ。それ以上掘ろうとしたら機械がいかれちまつてね、それでおかしいってんでこの基地の機材を使つて調査したら、なんと戦艦ドッグがうまつていたんだ。それも時代計測では約一万二千年前になる。どうも、火星の超古代文明の遺跡らしくてな。しかも、驚くことに、まだ動いていたんだ。」

「… 火星の超古代文明… まさか」

顔を険しくしたネルビーの疑問は、クレイトンの答えで明らかになつた。

「そうだ、おまえさんの『』察しの通り。その文明つてのは、アルクレシュオン大文明の事さ」

アルクレシュオン… 遥か時の彼方、一万二千年以上前にこの太陽系を中心に栄えた超文明である。とてつもない科学力を誇りながら、争い事を嫌い、平和を愛した種族だ。その科学力の中でも優秀だったのは造船技術である。特に彼らの開発したプラズマエンジンは傑作だつた。出力、燃焼効率など、どれをとっても他のエンジンの追従を許さない。現に、ネルビーが艦長を務めた『ヘリテイジ』でも採用されていた。まあ。あの船も古代人の遺産だつたのだが。

「一応念のためといつちやなんだが、ドッグ内を調査してみたんだ。すると期待通りかな。やっぱりあつたんだよ。」

そこでクレイトンはニヤリと笑つた。

「古代戦艦か！？」

「そうだ。彼らの遺産だよ。」

その答えに、ネルビーは険しい顔になった。当時古代人の残した遺産は『ヘリテイジ』を除いて全て破壊されたしまつたと聞いていた。それだけに、『ヘリテイジ』の発見には大きな期待と希望があつたのだ。

しかし、そんな船でも黒銀河の… あの船には敵わなかつた。

「黒銀河の… 何つたかな。あの船。えーと…」

「『ゴダ』の事か？」

「そうそう！『ゴダ』だ！その船のことがな、ドッグのメインコンピューターに入っていたんだ。早速解析したらだな、なんと、あの船は古代人が建造したものらしい。もともと、アルクレシュオンのは、敵さんの奴隸だつたらしいな。造船技術が高いし優れた科学力を持っていた、だから皆殺しにはあわなかつたんだろ。しかも仕事はきつちりこなす。」

そこでクレイトンは大きく腕を振った。

「少しは連邦も見習つてほしいぜ。」

少々愚痴が入つたが、クレイトンは続けた。

「で、その職人どもがだな。敵さんが人殺しの道具ばっかり作らせるもんだから嫌気がさしちまつて……ある日、前々から練つていた大脱走計画を実行したんだ。」

「……どうやつてそんなことをしたんだ？奴隸なら終始監視されてるはずだ」

ネルビーはいつのまにかクレイトンの話に食いついていた、その事に本人は気づいていなかつた、いや、ふりかもしないが：

「言つたろ、彼らは仕事をきつちりこなす職人だつた。長い間信用できる物を作り続けると、依頼主つてのは絶対の信頼を抱くようになる。そうなるとしめたもんさ。最初に顔を合わせると後は完成した時しか顔を出さなくなるからな。その間、古代人はやつらの船を作るかたわら自分たちの脱走用の船も建造していたのさ。その一つが『ヘリテイジ』てわけだ。『ヘリテイジ』……いや、彼らの言葉では『プロトリオン』か。これは『光の船』つて意味だつたらしい。俺たち同様、希望の光だつたわけだ」

「なるほどな、おかしな話だ。長い時間がたつてゐるのに今だに希望の光か。彼らは『ヘリテイジ』が再び戦争に使われる事を知つていて残したんだろうか……平和を愛する種族が……」

ネルビーは目の前が暗くなつたような錯覚に陥つた。古代人の素性も知らず、彼らの遺産を使い、そして負けたのだ。十年前の悪夢

が蘇る。自分をかばい、犠牲となつていつた同胞達。彼らの魂が今  
だに眠るこの宇宙を、再び砲火の色に染めるのだ。

やりきれない気持ちでいっぱいになつてゐる彼に、クレイトンの言  
葉が容赦なく追い討ちをかけた。

「残念だがな、ネルビー。古代人は知つていたんだよ、だから船を  
残したんだ。」

「何……！」

彼はクレイトンを睨み付けた。が、そんな視線をものともせぬよ  
うにクレイトンは続けた。

「アルクレシュオンはなかなか巧みだつたようだ。これもドッグの  
記録だがな……残された船は全部で三隻！ まずは『ヘリティージ』だ、  
そして今回発掘された古代戦艦。それに現在月面裏で発掘されてる  
超大型船『マルドウークス』、彼らはこれらの船を『オルフェウス  
型』と呼んでいたらしい。『ヘリティージ』はオルフェウス型三番艦、  
『マルドウーカス』は二番艦。てな感じでな」

「そうか、それじゃ今回発掘された船はどうなんだ？」

クレイトンは再び大げさに両腕を広げた。

「あれはブラックボックスがだいぶ多くてな、まだ解析が終わつて  
ないんだ。現段階で分かつてゐるのは、あの船はオルフェウス型ハ  
番艦。名称はまだ与えられていなかつたらしい。艦首プレートには  
古代語で『銀河より迫りし闇を葬りさん、我が魂は光の槍となり  
て闇を討つ。我が名は死の翼』て刻印がはいつてただけなんだわ。」

「死の翼……か。まるでルシファーダな。十三番目の天使か。  
……なるほど、ルシファーダか。」

何となく言つた一言だが、悪くなかつた。船の名前にはふさわし  
くないかもしぬないが、いざとなればそう呼ぶのも構わないだろう。  
クレイトンも納得しているようだ。

だが、この男と気が合うつてるのは、ネルビーには何となく抵抗があつた……

「で、この船は一体どういう代物なんだ？ 期待を裏切らなかつたと

「いう事はそれなりなんだろうな？」

「当たり前だ、こいつのスペックははつきり言つて・・・」

クレイトンは両手を上げて、文字通りお手上げの格好をした。

「異常だ。恐らく連合の科学力を総結集しても建造は不可能に近い。

」

ネルビーは息をのんだ。お構いなしにクレイトンは続ける。

「まずナノシステムが完全に制御されている。船がダメージを受けたら即座にナノマシンが修復を開始するつてやつだな。これには我々もびっくりだ。被弾と同時に修理だからな、笑っちゃうぜ。それと、全方向電磁シールド。船の前にバリヤーを張るんだが、こいつがよくできてる。メインエンジンに負担がかからないよう補助エンジン使ってるんだ。これなら、メインエンジンをフルに使える！それから武装だが、主砲には対戦艦電磁ショックカノンが四門。プログレッシブレーザーが両舷八基、アクティブラーベーが四基、ミサイル発射管六門・・・」

クレイトンは一つ一つ指を折つて数を確認していく

「まるで要塞だな。」

「当たり前だ、古代人は黒銀河の来襲に備えてこいつを十二世代かけて建造したんだ。そのスペックは『コダ』をこえてるんだぜ。こいつには銀河の未来が託されてるんだからな。」

「…未来か」

そこで廊下は終わっていた。リノリウムのタイルが終わり、今度はコンクリート調のパネルが広がっている。

ふと見上げるとその先には眩いばかりの紺色の巨体がアンカー（船をドッグに収容するための置き台のようなもの）に乗つていた。『ヘルテイジ』より一回り大きく、なおかつ偉大なものが感じられる。両舷と艦の後ろ上下に備えられた大型のスタビライザー、巨大なエンジンスラスター、二ヶ所あるのだろうか、ブリッヂらしき窓が二つ。前面に張り出した艦首には、赤いシールドで仕切られたようなものがある。

「こいつがおまえさんの指揮する船だ。正式名称、第十一世代超光速星系間航行型超ド級宇宙戦艦…解析できた言葉はさつきの刻印とこれだけ…どうだ？いかついだろ？」

クレイトンは首を持ち上げながら、得意げに口を開いた。ネルビ

ーは、その巨体に見とれていて、返事もどこかおぼつかない。

「…ああ、こいつは凄い…責任は重大だな。こいつもプラズマエンジンなんだろ？」

するとクレイトンは人差し指を出して、チチチチと口を鳴らした。

「甘い」と言つてんじゃないぜ、艦長？こんだけの巨体だ。大型ジエネレーター搭載の大出力エンジンどころか、プラズマエンジンでも焼きついちまう！こいつにのつかつてんのは縮退炉を搭載した超输出機関、その名もイオンエンジンだ。パワーはプラズマエンジンの軽く8倍！驚いたか！？」

「プラズマエンジンの8倍！？」

これにはネルビーも驚かされた。プラズマエンジンは、空間上に漂つている粒子を圧縮シリンドラー内に取り込み、高速で回転させ、プラズマイオンと陽電子に分離させ反発させた際に生じる高エネルギーを取り出し動力とする機関である。太陽系艦隊で採用されている核融合機関と違い、高効率でエネルギーが取り出せ、なおかつハイパワーで利便性が高いというのが売りだが…

地球軍の科学力では、理論さえ完成してはいるものの、実現は難しいといわれてきた。そんな大出力を誇るプラズマエンジンだが、今回の発掘ではそれを超えているというのだ。古代人がいかに切羽詰つた状態なのが伺える。しかも十一世代かけて建造してきたのだ。彼らのこの船に対する気持ちがネルビーの中に広がつていいくのが分かる。長く封印されてきたが、今がその時なのだろう。この船は、彼らにとつてもこの銀河の民にとつても、『ノアの箱舟』とも言える存在なのだ。

「ネルビー！ネルビー艦長かえ？」

ふいに後ろから声をかけられた。振り向くと誰もいない。おかしいなと思っていると、

「！」じやよ、艦長」

聞きなれた声だ、声の方向に田を向けると・・・いや、正確にはさげたのだが、田の前には懐かしい顔が立っていた。

「クオーレ機関長！！」

「はっは！元気じゃつたかの？」

クオーレと呼ばれた老人は人懐っこい笑顔を彼に向けていた。もう六十を過ぎているのではないだろうか、顔には深い皺がほりこまれている。彼の度重なる苦労がうかがえた。

「久しぶりです、機関長！！お元気そうで！いろいろ苦労があつたんでは・・・？」

「いやいや、あんたに比べたらの。わしのはちとも苦労ではなかつたよ、それより、また艦長と旅ができると思うたらのおー嬉しくて基地に一番乗りしてしもうたわ！！わっはっはっはー！」

機関長の嬉しそうな高笑いがドッグ内に響いた。その大声は軍でも有名だったが今だに健在のようだ。だが、その笑いも、クレイトンの一言で消え去った。

「さて、艦長。そろそろ時間だ。」

「時間？」

「そう。お前さんの要望通り、荒くれ共を集めといたぜー！」

クレイトンはニヤリと笑った。

「感動の！」対面さ。」

## Stage 2 集結

ジユノン基地の遙か上空、火星の衛星軌道上にそれらはたたずんでいた。銀色の装甲に太陽の光が反射している。全部で6隻。間違いなく連合艦隊のものではない。黒銀河の艦隊だ。恐らく、冥王星圏内の前線を突破してきたのだろう。その旗艦らしき船体は、周りの巡洋艦よりも一回り大きく、そして輝いている。

彼らは、ある任務を遂行するために、ここまでやつてきたのだ。「司令、3番艦『メルド・グラ・ヴィラス』より入電。敵、地上基地地下8キロの地点より高エネルギー反応を確認。恐らく例の物である。対応について指示を待つ」と言つております。」

通信手が、艦隊司令らしき人物にそう告げた。

「そうか……やはり彼らはここに残していたか。」

その赤い瞳は火星の二酸化炭素の雲を睨み付けていた。まるで故郷を眺めているような…しかし、鋭い目つきだ。

「全艦隊に伝令。これより全艦第一種攻撃体制。目標は地上基地地下8キロの高エネルギー体。攻撃開始は私の指示を待て。」

「はっ、ただちに発令いたします。」

通信手は手際よく命令を艦隊中に送信した。

銀色の髪をなびかせながら、艦隊司令と呼ばれる男はブリッヂの中央に立つた。

「地球人よ、悪く思つな。これも宿命なのだ。この銀河に翼は二つもいらぬ。」

その赤い瞳はいつまでも火星を見つめ続けていた。

ジユノン基地の作戦室には、すでに古代戦艦に搭乗するクルー達が集結していた。どれも連合艦隊では選りすぐりの凄腕ばかりである、その中には、つい最近、宇宙軍学校をそれぞれ首席で卒業した者もいる。ルイス・アンダーソンもその一人だ。専攻は索敵。スク

一ルでの成績はトップである。彼に並ぶように隣に座っているのは、操船コースをトップでクリアしたローマン・シュバイツだ。二人ともスクール時代からの無二の親友である。

「なあ、ルイス。カフェオレ持つてきたか？」

「ああ、ばっちりだ。一航海どころか、十年はもつぜ。」

ルイスの言うカフェオレとは、ローマンがスクールの売店から拌借してきたインスタントのカフェオレである。これがなかなか、インスタントのくせにうまいのである。勉強で疲れきった頭に渴を入れてくれるのだ。二人ともこのカフェオレがなければ生きていけないくらい（大げさだが…）はまっている。とにかく、しばらくは手放せない品物なのだ。

「しかし、ブリーフィングってのはなかなか始まんねえな～。ローマン、カフェオレ作りに行こうぜ。」

そう言いながらルイスが立ち上がりと何者がそれを遮った。ついでに、げんこつもくらつたのである…「こつん！」という響きが部屋全体に響き渡つた。皆が音のした方に目をむけている。

「いっ…てええええ！誰だ、こんちくしょうーー！」

「ルイス、あなたね…少しばおとなしくしたらどうなの？」

声の主は、ルイス達と同じく軍学校を卒業したばかりの新米、アンナ・フレデリックである。専攻は艦隊指揮、今回の配属での希望部署は副指揮官。俗に言う副艦長だ。この三人、実は同じスクールからの新卒採用なのだが、いかんせん仲が悪い。しかもアンナはこの一人に対しては中途半端な事しかやらないグータラにしか考えていないのだ。各専攻で優秀な成績を収めているほかの者に対しての態度も非常に冷たい。そこからついたあだ名が『クールレディ』、もちろん本人は知らない。容姿端麗、寄り来る男性は全て鉄壁のガードで撃沈。恐ろしい女である。そんな女性と同じ船に乗るのだ。彼らの運も尽きたといえよう。

「あなた達！私達はこの場にいる者と違つて、まがりなりにもスクールを首席で卒業してるエリートなのよ！それなりに慎みとプライ

ドを持つ行動をしてほしいわね。」

エリート感むき出しへ語る彼女を、その場にいる者達は快く思わなかつた。新卒の新米が何を言うか…と言つた具合である。その空気をいち早く悟つたのか、ルイスとローマンは慌てて彼女の口をふさぎにいった。

「いい加減にしろ！先輩達に謝るんだ！おまえ自分の立場わかつてんのかよ！」

「うるさいわね！私は副艦長候補よ！船の重要責任者の一人よ！あんた達なんかよりずっと優秀なんだから！」

言しながらアンナは自分を押さえ込もうとする手を振り解き、いきり立つた。そして部屋中を見回しながらこいつ言い放つたのだ。

「先輩方に忠告しておきますけどね、連合艦隊きっとの選りすぐりだか何だか知らないんですけど！私が副官を勤める本艦では、私の指示に従つていただきますからね！！」

さすがにこの一言は皆の怒りに火を付けた。今までの我慢がぶち破られたのだ。部屋中から彼女に対する罵声が飛び交つている。中には殴りかかるとする者もいて、それを必死で止めている者もある。その様子を、アンナが高みの見物とでも言つた具合に眺めていると、ルイスとローマンは今一度といわんばかりにアンナに飛び掛けた。

「おまえは馬鹿か！何とち狂つた事言つてやがる！第一おまえなんかが副長やつたら船が沈んじまうぜ！…」

「頼むからもうこれ以上皆様の怒りは買わないでくれ！…」

二人の行動と願いは空しく、またもや振りほどかれた。

「うるさいわね！だから何だつてんのよ！後輩だからって遠慮なんか必要ないじゃない！悔しかつたら新米よりいい働きしろつてのよ…」

「じもつともな意見だ、身にしみるよ」

「へ？」

アンナが後ろを振り向くと、そこには頬のこけた、長髪で背の高

い男が立っていた。アンナを見下ろすようにそのままの目つきは鋭くなっている。服装は、何やら階級の高そうな、しいて言えば艦長服のようだ。

「あんた誰？えつらそうな服着てさー！」これは新型艦のクルーのブリーフィングルームよ、あなたみたいなルンペーンさんながらのおっさんが来るようなとこじやないわ！」

男はたじろぐ事なく、自分に罵声を浴びせてくるアンナを鋭い目つきで睨み返しながら口を開いた。

「席につきたまえ、ブリーフィングを始める。」

田つきに圧倒されたのか、アンナはたじろぎながら、しかし目線を離す事なくそのまま椅子に座り込んだ。そして、まるで獅子に睨まれたウサギのように静かになった。それを確認すると男はそのまま部屋の奥まで行き、全員の視線を集めやすい公演台に立つと、こう言つた。

「みんな時間の迫る中、はるばる」「苦労だった。私が今日から君たちの艦長を勤めるネルビー・モルラントだ。」

名前を聞いた途端、皆の顔つきが変わった。同時に動搖なども沸き起こつていてるようだ。その様子を、やはりな…といった感じでネルビーは眺めている。眺めながら彼は続けた。

「時間がないので手短にします。諸君も知つての通り、黒銀河の進行が再び始まつた。十年前の銀河大戦とは違い、向こうは本気で我々の銀河を制圧しようとしている。もしそうなれば、この銀河始まつて以来の闇の統制が待つていて。それだけはなんとしても食い止めねばならん。そのためには、やつ等の艦隊を一早く叩く必要がある。黒銀河の艦隊を早期発見、殲滅。これが我々に与えられた任務だ。」

皆静まり返つていてる。まさか、自分たちがこれから乗る船がそんな重要な、そして危険な任務を与えられているとは考えていなかつたからだ。しばらくの間沈黙が続き、一人が席を立つた。そして何もいわずにその場を離れ始めた。一人、また一人。次々と席を離れ、

立ち去る者がいなくなつた頃、部屋には最初いた時の約三分の一程度しか残つていなかつた。もちろん新米三人組もいる。

「予想以上の結果だな。」

部屋の奥から声がしたのでそちらを向くと、そこにはクレイトンがたつっていた。

「参謀、これだけ残つてゐるが、どうする？」

ネルビーの問いに、クレイトンは笑みを浮かべながら答えた。

「問題はない、すぐに任務にとりかかつてくれ。時間がないのでな。それから、君たちとは別にもう数人搭乗する。…まだ到着していいがな。遅刻だ。」

「あいつらか…」

ネルビーははにかんだ。それを見て、クレイトンは少々早口に言った。

「とにかく、艦長。急いでくれ。奴らは到着しだいブリッヂに押し込む。さつきも言つたが、時間がない。衛星軌道上に黒銀河の艦隊を確認した。早急に発進準備に取り掛かるんだ。」

「了解だ、総員乗艦。発進準備にかかる！」

## Stage 3 発進

古代戦艦の第一艦橋は思つていたより広かつた。艦長席を中心には先頭が操舵、向かつて左が索敵、右が砲撃、真ん中には天文図らしき球体があり、その左右には通信機と副長席が備わつてゐる。有機的なデザインからは想像もつかないよつた落ち着く雰囲気を、この艦橋は保つていた。

「艦長！衛星軌道上にエネルギー反応を確認しました。数、編成からみて、恐らく黒銀河の艦隊かと思われます。」

レーダーの捉えた反応を、マリアは目をこらして見ていた。

「そうか、何か動きは？」

「ありません。今だ沈黙のままです。」

マリアの返事を受けた後、ネルビーは通話スイッチに向かつて口を開いた。

「機関室、補機関のチェックはどうだ？」

ネルビーが艦内通信機を使って質問すると即返答が返つてきた。しかも映像付きでだ。こういつた機能は『ヘリテイジ』にも備わっていた。やはり、古代の技術は我々よりも先に進んでいるのだな：ふとネルビーはそう思つた。

「まだ済んどらん、なかなか厄介でな。」

「ふむ。仕方ないな、なるべく急いでくれ」

了解と返答があり、通信は切れた。ネルビーはそのまま艦長席に沈み込むように座つた。十年振りの艦長席は、座り心地のせいか軽い眠気を誘つてきが彼はそれを無視した。

すでに艦内では配置が決まつていて、まず操舵はローマンである。次に索敵はルイス、砲撃は、先ほど大遅刻でネルビーに一喝されたニック・アンダーソン、通信は同じく大目玉を喰らつたホエン・ロン・パダ（この二人は十年前まで『ヘリテイジ』のクルーだった、ちなみにニックはルイスの兄である）そして副艦長は、希望通りな

のか。先ほどブリーフィングルームで皆に一太刀浴びせたアンナだ。エンジンルームではクオーレが機関長として若者をびしばしこき使つている。

現在、船は基地の大出力ジェネレーターから電力を供給される。エンジンの始動に大電力が必要だからだ。しかし、エンジンのチェックがなかなかはからず、船は最小限の電力で出港準備を行つていて。今敵艦隊の攻撃を受けたら、いくらこの船でも一瞬でただの鉄屑に変わってしまうだろう。

そんな緊迫した空気が流れる中、船のレーダーがエネルギー反応を捉えた。

「直上艦隊より砲撃を確認！！約15秒で地上基地に到達します！」 ルイスが叫ぶと同時に衛星軌道から無数の閃光が放たれた。黒銀河の艦隊が攻撃を始めたのだ。弾道が地上基地を目指して突き進んでゆく。それはまるで槍のごとく地上に降り注いでいった。

「来ます！！」

「総員ショック体勢！！」

ドーン！という爆音とともに衝撃がドッグ全体を襲つた。壁全体がビリビリと揺れている。慣れない者はシートから弾き飛ばされてしまふ程の衝撃だ。ブリッジの電灯が白色から赤色の非常灯に切り替わる。ネルビーはおせじにも広いとは言えない艦長席にしがみつきながらルイスに問い合わせた。

「地上基地は！？」

「現在防御シールドを展開、何とか耐えています！」

ネルビーは奥歯を噛み締めた。時間がないのだ。早くこのガラクタを眠りから呼び起こし、上空のハエをたたかねばならない。しかし、黒銀河の艦隊からの攻撃を受け続けている今、何もできない状態に氣ばかりが焦る。

「なかなかしぶといな、まだ片付かんのか？」

艦隊司令は焦っていた。彼の予想通り火星に眠っていたものは彼

らが探していたものだつたのだ。

「バリヤーを展開しているのです、反撃してくる様子はありません」

艦隊司令の問いかけに、索敵士が応えた。艦隊司令は少々不機嫌になつた。

「時間がないのだ、仕方ないな。粒子反応爆弾投下！」

「は！」

艦隊旗艦の底が開き、拳銃のバレルのような物が出てきた。そこから何か光のような物がまたたいている。

「司令、投下準備完了しました」

「うむ、投下しろ」

司令の合図とともに、発射口から勢いよく光の玉が飛び出し、地上基地を目指して降下していく。

「直上から高エネルギー反応！－恐らく粒子反応型爆雷です！」

ルイスが張り裂けんばかりに叫んだ。

「いかん！ 総員対ショック体勢をとれ！－」

ネルビーが言つと同時に、軌道艦隊から放たれた光の玉は超高速で地上に落しパツと炸裂したかと思うと一気に大地を白い光で飲み込んでいく。上空の雲は蒸発し、爆風は地上を一瞬のうちに灼熱地獄へと変化させた。その威力は地上基地を消滅させると同時に地下ドッグにもダメージを与える。ドッグ全体に亀裂が走り、なおもまだ爆音が鳴り響いている。振動に耐えかねたのか、ドッグのトンネルと地上を仕切るゲートが落下を始めた。

「地上ゲート大破！－ドッグ内に落下して来ます！」

ルイスが策部と、ドドドーという音と共に、上から落ちてきた瓦礫が船を埋めて行く！まるで雪崩のことく、瓦礫は降り止む事を知らない。激しい衝撃が終わった頃には船はすっかり瓦礫に埋もれてしまい、身動きの取れる状態ではなかつた。

「くつ…全員無事か？」

「な、なんとか…」

「ネルビーが声をかけると四方から声がした。皆無事のようだ。

「…予備電源、入ります…」

ブリッジが赤い電灯で照らされる。スイッチを入れたのはルイスだつた。それぞれがおぼつかぬ足取りで自分の席に着くと、ネルビーはアンナに問いかけた。

「副長、状況は？」

「は、はい…先ほどの攻撃で基地からの電力供給ケーブルが切断されました。現在、本艦は予備電源で運行されていますが、復旧には十分ほど時間がかかるようです」

基地からの電力が供給されない今、この船はまさに鉄屑同然である。ネルビーはいかんともしがたい状況に歯軋りした。と同時に基地の人間の安否が気にかかる。

「ホエン、基地のクルーはどうなつたか、連絡はとれんか？」

「…駄目です。先ほどから信号を出しているんですけど…全く反応がありません」

そう言いながらホエンは通信機の周波数を変えながら何度も試みる。「…応答なし…やはり駄目です！…どことも連絡が取れません。妨害電波が出ている訳ではないのですが…」

「…どうか、ルイス。どうだ？ 探査は可能か？」

ネルビーはルイスにも索敵を促した。が、

「駄目です！ 音響探知は可能ですが、スキヤナー及びレーダーは非常電源では電力が足りないため探査できません！ 生命反応の確認も不可能です！！！」

なんと言ふことだ… ネルビーは肩を落とした。基地のクルーはかなりの人数のはず。たとえシェルターに避難したとしても、全員無事かどうかは定かではない… それほどの爆撃だつたのである。最悪の場合は全員消滅したとも考えられるのだ。

「黒銀河め…！」

ネルビーが唸ると同時に、艦長席の通信ディスプレイに光が灯つ

た。

「艦長、さつきの衝撃はなんじゃ！？」

機関長が艦内通信で問い合わせてきたのである。突然の爆撃で驚いているのか、やや興奮気味なのがルビーにも分かる。どうやら機関室では新米のクルーが突然の衝撃に動搖しているようで、皆のどよめきがマイクを通して聞こえている。

「何でもない！敵艦の攻撃を受けただけだ。」

「そうか、こつちは機関室じゃから外の様子はさっぱり分からんわい！おかげで新米は慌てとるわ。みんな若いのう！－わっはっは！それより艦長、待たせてすまなんだ。補機関のチェック完了じゃ！これで何とか動くじやろうて！ただし補機関のみの運行じゃと活動限界時間は十五分少々じゃ！主砲の無駄打ちやバリヤーの使用には十二分に気をつけるんじやぞ！始動後は、すぐに主機関のチェックにとりかかる！」

ネルビーの顔が一瞬引き締まったように見えた。

「了解した。」

通信を切るとネルビーは深く息を吸った。再び艦長として宇宙に上がるのだ。

この日をどんなに待つたことか。

気が早くなるのを抑えながら、ネルビーは口を開いた。

「機関始動！発進準備！！」

号令をかけるとみんな手際よく操作を開始した。ブリッジに明かりが戻ると、今度は次々とディスプレイに電源が入っていく。

「機関室！補機プラズマエンジン始動！！」

ネルビーの指示でクオーレはエンジンの始動レバーを引き起こした。その瞬間、プラズマエンジン内に電流が走り稲妻が飛び散るような光が散乱した。

「プラズマエンジン始動、内圧安定！フライホイール接続準備よろし！」

「反重力推進機、及び粒子推進機に動力伝達、船体の水平確保だ！」

傾斜復元！…船体起こせー！」

ネルビーの指示でローマンが操舵レバーを操作すると、船体はゆっくりと引き起こされ、傾いていた船が水平に保たれていく。船はドッグの瓦礫の中からゆっくりと浮かび上がり、紺碧に輝く船体を宙に浮かべ始めた。

「双方回線開きます！全兵装の管制ラインチェック！」

ニックはすばやくスイッチを押していった。ブリッヂのメインディスプレイやメインウインドウに電源が入り、外の様子が鮮明に映し出される。船の外は、まさしく廃墟だった。

「艦長！粒子推進、及びフライホイール接続終了！…発進準備完了しました！」

アンナの声がブリッジに響く。準備は完了した、後はネルビーの指示を待つだけである。ネルビーは深く息を吸うと、静かに口を開いた。

「諸君、本艦はこれよつこの地下ドッグを脱出。第一戦闘速度で成層圏を突破！衛星軌道上の艦隊を殲滅する。その後、冥王星軌道艦隊の援護に回る。恐らく長く、苦しい戦いになるだろう…だが、我々にはこの銀河の運命が託されている。すまんが、みんなの命をくれ」

ネルビーの言葉に全員息を飲んだ。ブリッジのクルーはみなネルビーの方を向いている。

「艦長、そんなこと言つてどうすんすか？俺たちは艦長に命預けてんすよ！俺たちの行く末は艦長の行く末！そんな弱気な」と言わないでくださいよ！」

ニックが言つた。

「艦長のいない十年は退屈でしたよ、それがまた艦長と一緒に船に乗れる。こんな面白な」とはないと思つてます。」

とホエイン。

「艦長、私たちはスクールを卒業したての新米ですが、艦長の伝説はスクールでも有名でした。皆のあこがれでした。そんな我々の目

指した人が今日の前で、しかも艦長席にいるのです。それだけでもう充分ですわ。」

「かー…さつきはあんなに息巻いてたくせによ。…」

ローマンの毒舌にアンナはギッと睨み返した…

「みんな…」

ネルビーは心が詰まった。皆の優しさが伝わってくる。

「艦長、俺やルイスも気持ちは一緒ですよーいつでも来いつてんだ！」

「おー…ローマン、俺を巻き込むな…」

「うるせーなーこの感動の場面に一人乗り遅れんのよ、おまえはーーー！」

「なんだとー！」

「つるさいーーー！」

一人の小競り合いをアンナが止めた。騒がしい三人だが、いるだけでの場が和む。

「行きましょう、艦長ーー星の海が俺たちを待つてますぜーーー！」

一ツクの言葉と共に、ネルビーはうなずき艦長帽を引き締めながら言った。

「発進するーーー！」

衛星軌道上で待機している敵艦隊のレーダーは、火星の地下での出来事を明確に捉えていた。

「司令！…地上基地地下よりエネルギー反応…上昇している模様です！…」

「何だと！」

艦隊司令は我が耳を疑つた。やつは基地だと消滅させたはずだ…だのに、何故！？

彼は、渾身の力を込めて叫んだ。

「粒子反応爆弾投下だ！早くしろ…！」

「し、しかし、連続で投下するには、発射バレルが持ちません…！」

「かまわん！かまわんから早く発射しろ…！」

彼は狂ったような形相で砲撃手を睨みつけた。砲撃手が指示を促すと、船底のバレルから光が放たれ、そのまま降下していった。と同時に、船底のバレルは吹き飛んだ。

「艦長…レーダーに反応…先ほどと同じエネルギー反応です、進路は…」

ルイスの目つきが変わる。

「本艦です！直上から来ます！」

ネルビーはふん！と鼻先を鳴らした。そのまま十年前の艦隊指揮の頃と同じ鋭さになつている。

「副長。接觸予定時間は？」

「約四十秒後には地上に接觸します！」

現在の船の位置は地下約5キロ圏内。このままの速度で上昇すれば本艦の鼻つ面が地上に出た時に接觸する…ネルビーの思考は瞬く間にこの計算を導きだした。現役から10年遠のいていたとはいえる速さには自分でさえもうぬぼれてしまつほどだ。彼はふとそん

な事を考えていた。が、目の前のピンチにはいかんせん対応しなければ、目覚めたばかりのこの船を消滅させてしまうかも知れない。それだけは避けなければ…

「ローマン、巡航速度から最大戦闘速度にあげる」

「この指示にはさすがに皆が驚いた。アンナが思わず叫んだ。

「艦長！今まで最大速度にすれば、主砲のチャージ中に地上ゲートにぶつかります…！」

「かまわん！銀河系最強の船だ、それくらい屁でもない！それに今まで接触すれば、地上に出さなくてもいい被害を出してしまって事になる。それだけは避けなればならん！」

ネルビーは艦長席から乗り出し、さらに続けた。

「「」のまま最大速度で地上ゲートを突破！そのまま上昇し、高度5千メートルで横方向に電磁シールドを開く！そこで受け止めるぞ！」

「艦長…！」

アンナの言葉はほぼ絶叫になっていた…しかし元クルーのニックとホエンは、ネルビーの指示に目をキラーンと輝かせた。

「さすが艦長！！そこなくつちや！おい、ローマン！聞いてたな！フルスロットルにしろ！今すぐだ！」

「まじかよ、ニック…！」

一瞬ローマンの顔が青くなるのが伺えた。が、そんなことはお構いなしにニックは続ける。

「当たり前だ…ここで指示通りにしなかつたらお前ら一人に平穏の日々はないぜ！」

ニックは不適な笑みを浮かべながらローマンとルイスを睨んだ。どうやらだいぶ興奮しているようである。ここまで来たら覚悟を決めるしかなかつた。スロットルレバーを握るローマンの手に汗が滲む。

「接触まで残り三十秒…！ローマン、俺お前信じる…！」  
ルイスが叫ぶ。

もう一！いつけ！

ローマンはスロットルレバーをフルにした。船のノズルから蒼い火柱が勢いよく噴き出してきた！

一塊在速度！時速1万八千！地上

アンナの報告と同時に、瓦礫の山となつてゐる地上ゲートが正面ディスプレイいっぱいに入つてきた。それはまるで、死者の世界で口を開け亡者を待つてゐる悪魔のようにも思えた。ネルビーの目はその一点だけを睨みつけていた。

行くぞ!!」の声が聞こえた。迷めまい

瓦礫となつた地上ゲートを突き破り、ついに古代戦艦がその姿を見せた。周囲に瓦礫を飛び散らかす程の勢いで現れたそれは、見る者がいればさぞ驚かせたであろう。約一万二千年ぶりに、この船はその姿を現したのだ。その姿は、まるで地球の神話に出てくる龍のような姿にも見える。ネルビー達は久々に空の色を眺めたい気分であつただろうが、それは許されなかつた。上空から超高速で迫る光の玉を、高度五千メートルで受け止めなければならぬのだ。アンナは、時間のカウントを続ける。

正面スクリーンに白い輝きを広げながら、超粒子の塊はまっすぐ

に古代戦艦に落ちてしまふ

アンナが叫んだ。「同時にネレーニが監査を出す。」

「ハリア展開準備！！本艦前方横方向にシールドを展開する！」

「スタジバイ完了!! 戻つ五秒!!!」

ネルビーは目の前を白く染めていく光を睨み続けた。

残り一秒！！

一今だ！！パリア展開！最大出力！！！」

古代戦艦の先端から青白い光の輪が放たれ、船を中心横に長いつば

いに広がって行く。そして、息つく間もなく直上から迫る超粒子の塊と接触した！激しい衝撃が古代戦艦を襲い、超粒子の塊は砕け散り四方へ飛び散つていった。その様子を軌道艦隊の司令官は、スクリーン越しに睨みつけていた。その顔は、驚きではなく、恐怖に歪んでいる。

「・・・馬鹿な・・・そんな・・・ユダの銀河砲に匹敵する威力を持つのだぞ・・・それを・・・受け止めたばかりか、四方に弾き飛ばすだと・・・」

彼は、汗ばむ手を握り締めた。

「本国の銀河艦隊に回線をつなげ、今すぐだ！！」

この艦隊だけでは奴には勝てん…となれば、本国の艦隊に応援を要請し我々はこのまま後方へ下がりつつ奴を迎撃せねばならん！やつとこの星域までやってきたのだ、このままむざむざと引き下がれるか！彼のプライドは非常に高かつた。幼い頃から将校に憧れ、努力し、猛勉強して士官学校へ入学した。成績は常にトップを譲らず、寝る間も惜しみながら、兵法、戦略…あらゆる知識を脳へ叩き込んでいったのだ。その甲斐あって、仕官学校を首席で卒業し、宇宙軍へ志願、夢にまで見た将校…そして、今の艦隊指揮官の地位まで登り詰めたのだ。そんな彼の事である。撤退と言う文字は、彼の頭にはひとつかけらもなかつた。そして、その事が彼を大きく後悔させることになる・・・

軌道艦隊からの直撃をバリヤーで回避した古代戦艦は、第一戦闘速度で上昇を続けていた。あれほどの衝撃にも関わらず、船のどこにも損傷はなかつた。何事もなかつたかのように紺碧の船体は空を突き進んでいく。

「現在高度一万八千メートル、間もなく成層圏を突破します。」

副長の報告に、ネルビーは相槌を打つ。第一艦橋の外の景色が青色から漆黒の闇へと変化していく。その闇の中には、幾千もの瞬く星達の姿があつた。壮大な景色である。皆がその景色に飲み込ま

れているその時、レーダーの警告音が鳴り響いた！

「敵軌道艦隊補足！！距離一万！迎撃体勢にある模様です！」

アンナが叫ぶ。ネルビーは、メインウインドウの奥に佇む船に影を睨みつけていた。

「黒銀河め…やる気か…？」

黒銀河の艦隊はすでに攻撃態勢を整えていた。その主砲達は確実に古代戦艦を捉え、いつでも攻撃可能な状態で待機している。あとは指示を待つばかりだ。彼らの目的は、古代戦艦の殲滅…それだけである。

## Stage 5 ギャラクシー、発射！

「全艦隊攻撃準備完了です！」

「うむ、よろしい。」

司令の赤い瞳は、正面スクリーンに映った古代の翼を捉えていた。  
本国の艦隊がここに到着するまでは我々が食い止めなければ…

「全艦隊へ伝達。全砲塔一斉正射！目標、前方古代戦艦！！」

彼は右腕を高く上げた。

「つてえーーー！」

右腕が勢い良く振り下ろされると、敵艦隊の全主砲が咆哮を上げた。砲身から飛び出す一筋の光が束となつて、紺碧に輝く、目覚めたばかりの古代戦艦に向かつて突き進んでいく。

「これで消し飛べえーーー！」

「艦長！敵全艦隊の攻撃を確認！主砲からの一斉正射ですーー！」

ルイスが叫んだ。

「くつ、こちらに攻撃をさせないつもりか…」

「あと十秒で着弾です！」

「副長！電磁シールドスタンバイ！最大出力だ！」

「了解！」

アンナは、バリヤーのスイッチに手を伸ばした。

「残り二秒ーーー！」

「今だーーー！」

ルイスとネルビーが重なるように叫ぶと、アンナは瞬時にスイッチを押した。船を包むようにバリヤーが展開され、黒銀河からの攻撃を食い止めた。

「ニック！一番砲塔に動力伝達！主砲発射用意！」

「了解！」

勢い良く応えると、ニックは主砲の発射に取り掛かる。だが…

「んん？」

砲撃用操作パネルが全て赤く点滅している。操作パネルの下には

『POWER EMPTY』と表示されている。ニックは焦った。

「ダメです！エネルギー不足で主砲の使用はできません！」

「何！？」

ニックに並んでアンナも叫んだ。

「艦長！補機関の出力低下！バリヤーの過使用で予定より多くエネルギーを消費しています！このままでは…」

アンナは立ち上がり、声を震わせながら言った。

「電磁シールド消失とともに…本艦は機関停止します…」

「…！」

ネルビーは一度握った拳をもう一度強く握った。その手は震えている。

何たることだ…黒銀河を前にして一太刀も浴びせられんとは…敵の攻撃は以前続いている。アンナの活動限界時間が残り三十秒も無いという言葉がブリッジに響き渡る。

ネルビーは、メインモニターに移っている黒銀河の艦隊を睨んでいる。

そして、古代戦艦のバリヤーは消えた…

「司令！敵戦艦の防御シールド、消失しました。」

その報告に、彼はニヤリと笑った。

「ほう…どうやら目覚めたばかりで主機関がまだ機能していないらしいな…よし、全艦隊の攻撃を奴に集中させろ！」

そして、スクリーンに映し出されている古代戦艦を指差しながら言い放つた。

「主機関が動かぬ奴など、恐るるにたらん！宇宙のチリにしてくれる…！」

再び敵艦隊の攻撃が始まった。だが、先ほどとは打って変わって激しい攻撃になっている。並の艦隊なら、一気に殲滅されてしまう

ほどの攻撃だ。攻撃は全て古代戦艦に直撃し、爆発音に混じって煙が噴き出している。

「いいぞ！攻撃の手を緩めるなー！」

司令は歓喜していた。攻撃はドンドン打ち込まれ、そのたびに爆発音が響いていた。爆煙が古代戦艦を包み込んで行く。

「目標！完全に沈黙！」

「よおし。撃ち方やめー！」

彼が手を上げて指示を出すと、艦隊は攻撃を止めた。

彼は満足していた。これで本国に外旋できる。これで出世の道が開ける。自分だけではない。彼の家族も国から称えられ、歴史の一ページを飾るだろう。

自分の艦隊は、ユダを越えたのだ…！

「くつくつく…はは…ふはははは…！」

彼は言い知れぬ喜びに満ち溢れた。ユダを持ってしても殲滅は難しいと言わってきた「死の翼」を、ユダより性能の劣るこの船で、艦隊で葬り去ることができたのだ。たとえ彼でなくともそうなるだろう。しかし、彼の喜びも、次の瞬間消えてしまうことになる。船のレーダーがエネルギー反応を捉えたのだ。

それも：

「目標内部に高エネルギー反応ーー先ほどとは比べ物になりません！とんでもない数値ですー！」

「何だとーー！」

司令が索敵士を跳ね飛ばし、ディスプレイを睨むと、彼の言つ通りとんでもない数値のエネルギーが観測されている。

「いーJ…これは…」

司令は、震えながら後ずさりした。

「…まさか…縮退炉が…イオンリアクターが起動したのか…！…？」

「目標、映像で捉えました！」

そう言つて、メインディスプレイに映し出されたのは、紺碧に輝く船体であった。それも…無傷である。

「ば……馬鹿な……艦隊の砲撃を全て浴びせたのに……む……無傷だと……」  
彼は拳を固く握り締めた。その手はひどく震えている。

「ぜ……全艦隊に伝令！今一度、『死の翼』に一斉攻撃をかける……」

古代戦艦のブリッジでは、皆が安堵のため息を漏らしていた。

「ふいー……危なかつた……」

ルイスが至極疲れきった顔でつぶやいた。

「全く……ひやひもんだつたぜ……」

ニックがそれにならう。

「どんびしゃのタイミングで主機関が動くんだもんなあ。」

ローマンが続いた。

「皆、気を緩めるな！まだ終わつたわけではないぞ……！」

ネルビーの一言で、ブリッジには再び緊張が走る。皆の顔がキリツと引き締まつた。

「副長、現在の状況は……？」

「はい。現在、本艦は主機関の起動により、ナノシステムの制御、及び電磁シールドの半永久使用による防衛システムのフルコンプリート、全兵装の使用が可能になっています。」

アンナは、自分の席にあるディスプレイを眺めながら返事をした。

「ということは……ギヤラクシーの使用も可能……ということだな？」

ネルビーの問いかけに、アンナははつきりと答えた。

「はい。ただし、ギャラクシー使用後は砲身及び機関冷却の為、約二十秒ほど全機関が停止しますが……」

「そうか……」

そう言つと、ネルビーは黙つてしまつた。だが、それも一瞬のことだった。ネルビーは顔を上げた。

「よおし、やるぞー！副長！第一砲塔に動力伝達！目標、前方敵戦艦

！」

それを聞いて、アンナも声を張り上げた。

「は！全艦攻撃態勢！対戦艦戦用意！第一砲塔に動力伝達、第一砲

塔安全装置解除！

「まつかせんしゃい！」

アンナの指示に、ニックは待つてましたと言わんばかりに操作パネルを操作した。古代戦艦の第一砲塔が旋回し、安全装置が解除された。ニックは照準ディスプレイを覗き込んで目標を確認する。照準は敵艦隊の一番先頭に位置する巡洋艦に定めてあつた。

「目標ロック！ エネルギー充填百パーセント！ 進路オールグリーン！ 副長、指示くれや！ いつでもぶつかなせるぜ！」

アンナはネルビーを見た。ネルビーは静かにうなずく。そして、叫んだ。

「ニック！ オープン・ファイア！」

「イエッサー！」

そう答えると、ニックは主砲の発射ボタンを押した。古代戦艦の第一砲塔から青白く光るエネルギーが勢いよく放出される。そして、それは瞬く間に敵艦隊まで伸びていき、照準を定めていた巡洋艦を貫いた。一瞬の間を置いて、巡洋艦は爆発し日下の惑星に落ちていく。一撃轟沈である。艦隊旗艦のブリッヂでそれを見ていた彼は、恐ろしさのあまり体中が震えていた。

「あ……あ……」

副官が近寄り、ぐぐもつた声で指示を聞く。

「司令……ご指示を……」

「攻撃だ……」

「……は？」

司令はながば絶叫で指示を出していた。

「攻撃だ！ 今すぐ……あの船をこの銀河から消滅させるのだ！！」

司令の絶叫と共に、敵艦隊は再び古代戦艦に照準を合わせた。その様子を、すでに古代戦艦のレーダーは捉えていた。

「艦長！ 敵艦隊が再び本艦に対して攻撃態勢をとっているようです！」

ルイスが報告した。それを聞いたアンナは怪訝な顔でネルビーを

見た。

「どうされますか？主機関が正常に稼動している今なら…」

「…君なら、ギャラクシーを使うかね？」

ネルビーの咄嗟の問いに、アンナは少々戸惑つた。彼女は自分の考えを読まれたように感じたのだ。

「確かに、今なら使うことは可能だな…時間もあまりない。出来れば、この局面は早々に仕切つてしまいたいところだ。」

そこまで言うと、ネルビーはニヒルに笑つた。

「そう… 考えたんだりう…副長？」

「…すばり…ですわ…」

アンナの答えにネルビーはふつと笑うと、「私もそう考えていたところだ」と言い、ニックに指示をした。

「ニック、ギャラクシー発射だ。」

「えっ！？」

そう言われ、ニックは思わず振り返つた。

「聞こえなかつたのか？ギャラクシー発射だ！」

「りょ…了解！」

そう言われ、ニックはギャラクシーの準備に取り掛かつた。ディスプレイの操作でギャラクシーを選択すると、操作パネルの横部分が赤く点滅し始める。彼はためらいもなく、そのボタンを押した。すると、艦首にある紅いシールド部分が下に折れ、艦首部分が左右に大きくせり出すうように開かれた。その中から、巨大な砲身が姿を現す。

「あ…あれは…」

それを旗艦のメインスクリーンで見ていた彼は絶句した。

「ぎ…銀河砲…」

その顔はみるみる青くなつていく。彼は少しづつ後ずさりを始めた。すでに彼のプライドはズタズタに引き裂かれ、その心には後悔の念がひしめき合つていた。

「て…撤退だ…」

彼はつぶやいた。だが、それはつぶやき以上には大きくならず、皆凍りついたかのようにその場から動けなくなってしまった。彼の見開かれた瞳には、古代戦艦の艦首から突如姿を現した砲身が焼きついている。それは、銀河砲と呼ばれる、黒銀河最強の船「ユダ」に備えられている最強の兵器と、姿が酷似していた。そして、その威力も…

「ギャラクシー、スタンバイ！ エネルギー充填開始！」

ニックはひたすら操作ディスプレイとにらめっこしている。

「現在、充填率二十パーセント…」

ニックの声がブリッヂに響く。皆にある種の緊張が走る。それは、今まで見たこともない何かをこの目で見る興奮と、何か見てはいけないようなものを見る後ろめたさが入り混じったような緊張感だ。その空気に飲み込まれそうになりながら、ニックはエネルギーのカウントを続けている。

「充填率七十パーセント！」

アンナの席にあるディスプレイには、船の様々な情報の他、エンジンの出力ゲージ等も備わっている。そこには、イオンエンジンの出力バーも記されており、ギャラクシーのエネルギーが七十パーセントを越えた瞬間、出力の半分以上が砲身に持つていかれたことが分かった。アンナは叫んだ。

「メイン・エンジン出力低下！ ギャラクシー内圧力上昇中…」

「充填率九十パーセント！」

「副長、カウント開始！」

ネルビーが言うと、アンナは発射のカウントを始めた。

「十、九、八…」

アンナの声が静かなブリッジに響き渡る。ブリッジが静か過ぎて、アンナの声が段々無機質になつていくようだ。

「三、二、一…ゼロ！」

ネルビーの目が鋭く光つた！

「ニック！、ギャラクシー、発射あ！！！」

ニックは、言われるまま、ギャラクシーの発射ボタンを押した！古代戦艦の艦首から現れた砲身からは、一瞬、粒子のような粒が集められ、そのままピシャ！という激しい音と共に、高出力のエネルギーが吐き出された。それは、敵の艦隊へ近づくにつれ、増幅し、巨大な光の波となつて敵の艦隊を包み込み、そして焼き尽くした。そのさまは、十年前の銀河大戦で、ユダが銀河連邦の艦隊へ放った攻撃と酷似していた。

ネルビーの耳には、あの時「ヘリティジ」をかばつて直撃を浴びた仲間の断末魔が響いた。それは、ニックとホエンも同じだったかもしれない。だが、これで彼らは「ユダ」と同じ力を持つたのだ。同じ、アルクレシュオンの力を…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6639f/>

---

オルフェウスの翼

2010年10月9日21時42分発行